



デュルケーム / デュルケーム学派研究会

Japanese Association for Durkheimian Studies

ニューズレター

第4号 [2003年12月25日発行]

編集事務局 奈良女子大学文学部

0742-20-3263, 3264

郵便振替口座番号：00980-4-20999

(口座名称)デュルケーム研究会

編集

大野道邦

中島道男

江頭大蔵

<mitikuni@mua.biglobe.ne.jp><mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp>

デュルケーム / デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中にあつて、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム / デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的開催する。

第6回研究例会(2003年4月19日、常葉学園短期大学)

報告1 宇城輝人氏(福井県立大学)
社会学の風景 階級から団地へ
コメンテーター：江頭大蔵氏(広島大学)

報告2 山下雅之氏(近畿大学)
社会学的方法の規準を考える
コメンテーター：池田祥英氏(早稲田大学)

第7回研究例会(2003年9月27日、奈良女子大学)

報告1 野中 亮氏(大阪樟蔭女子大学)
『社会分業論』におけるコミュニケーションの問題
コメンテーター：横井敏秀氏(富山国際大学)

報告2 飯田剛史氏(富山大学)
在日コリアンの祭 デュルケーム的考察
コメンテーター：小川伸彦氏(奈良女子大学)

第6回研究例会報告要旨

〔報告1〕 宇城輝人(福井県立大学)

社会学の風景 階級から団地へ(イントロ)

1. 階級をとらえる

モーリス・アルヴァクスの社会学を、19世紀後半から20世紀半ばごろまでに大規模にすすんだ再編の結果成立したわれわれの社会空間の本質的な構成要素としてとらえること。いわば現在性の起源のひとつとしてとらえること。この社会空間の再編の起動力となったのは社会政策の整備であるが、それにあたってなによりも必要なのはその対象の画定である。その対象画定の作業としてアルヴァクスの社会学を理解することができるのでは

ないか。

このような見かたは、おそらく、アルヴァクスをデュルケームに結びつけるというよりは、アルベール・トマを中心とするフランス社会主義の行政的知の支柱としてシミアンとの一体性を強調することになる。さらに、デュルケーム学派の展開として、モース（そしてレヴィ＝ストロース）に代表される民族学的で象徴的な「文化主義的」潮流とは一線を画す別の流れに注意を喚起するだろう。

アルヴァクスの流れは社会の物質性と空間性への強い関心によって特徴づけることができる。彼が社会形態学を掘り下げたことは周知であるが、ここでは、それと同時に都市社会学と呼びうる試みが多くなされたということを指摘しておきたい。

アルヴァクスが社会階級からその社会学的な仕事をはじめたことには強い意味を読み取るべきだと思う。ドイツ社会政策学会やヘーゲル流マルクス主義のように意識と価値体系ではなく、それらの物質的表現に着目し、人口と社会装置の空間的配置において階級を見ているからである。

2. 物質と社会

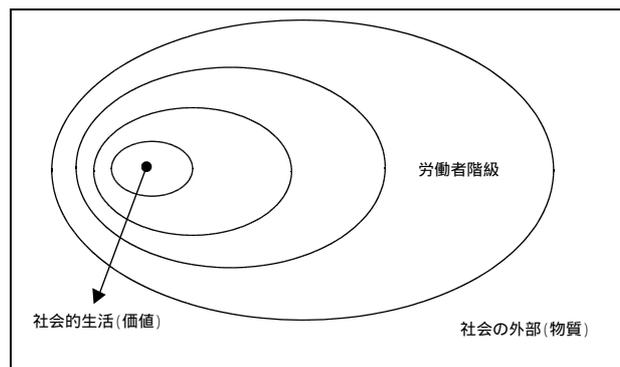
1920年に発表された論文「物質と社会」をとりあげたい。ここでは『労働者階級と生活水準』（1913年）で空間的な階級構造として把握された社会の最周縁部が「物質」という概念をつうじて現れる。そのような視点から労働者階級は「その労働を果たすために物質に向かい社会の外へ出なければならぬ人びとの全体」と定義される。このように階級が規定されることによって、人口の諸相と都市空間のあいだに微妙な共鳴関係が生まれる。さらに「物質に向かう労働」という表現が、いわゆる「疎外された労働」ということながら、疎外論とはまったく異なる論理をつうじて、いいあてている点も重要である。

疎外の問題設定によらずに空間性の問題にそってたどられる論理が浮き彫りにするのは、戦間期における労働の問題が社会学にどのような課題を与えたのか、ということであり、社会学と対抗関係あるいは共犯関係にあるテイラー主義や労働科学といった知と実践の諸形態とのかかわりあいである。「労働する人間 *homme au travail*」をとりまくあらゆる環境（物理的・生理的・心理的・社会的……）を一体的に認識することが課題なのである。このことは社会主義者としてのアルヴァクスの実践的関心につながってゆくだろう。

3. 社会の空間的展開

物質に向かい社会の外に出ること。その反対は、社会の内に入ること、であろう。この内と外の切り替えが物理空間の移動と相関する。すなわち工場の門を闕とする空間の分割であり、労働者がそこを通過して出入りすることである。家屋から街路をへて工場の内側へ入り、工場の内部で「物質に向かう」活動をしたのち、同じ経路を逆にたどって家路につく労働者の空間が、彼らの生活そのものと照応しており、労働者階級というものを表現する。

「生活水準 *niveaux de vie*」という概念には注意が必要だ。この概念を現代的に購買力と同じ意味で解してはならない。この概念が意味するのは社会への統合度ないし包摂度であり、それを物質と社会の中心とのあいだのどの地点に集団あるいは個人が位置しているかを空間的に表すのである。収入などの数量化された連続的な指標ではなく諸階級の「本質的な不連続性」こそが重要である。こうして、闕によって不連続に分かたれた空間構成において、アルヴァクスの社会は、観察記述のレベルと理論的なレベルが重なりあう。



この重なりの上に成り立つのが「生活様式 genres de vie」である。この概念もいわゆるライフスタイルという意味で用いられていないことに注意しよう。人文地理学に由来するこの概念は、空間的・物質的条件への人間の適応を表現する概念であって、価値体系や規範には収まりきれない含意をもつ。以上のふたつの概念によって社会体の理論的・具体的空間は前頁の図のような図式を描くことになる。図のなかの各円環は、そこにあてはまる人口の生活様式と統合度（生活水準）をもつ固有の“生”を表すだろう。

このようにして、社会統合ないしは包摂といった社会政策の機能を、都市を中核とする国土という具体空間のうえにマッピングすることが可能になるだろう。あるいは逆に都市や郊外といった具体空間を制御することによって社会（学）的な効果を発生させる思考に道を開くだろう。

都市空間は、人口のたんなる生態でも、また伝統的な貧民統治のたんなる規律化の装置でもなくなってゆく。社会そのもののコントローラーでもジェネレーターでもあるものへと変容していこうとしている。社会階級論と都市をめぐる社会的なものとは、このような連関のもとにつながっている。

〔報告2〕 山下雅之（近畿大学）

社会学的方法の規準を考える

われわれ社会学者、とりわけ日本の社会学者は、100年以上前に書かれたデュルケームの方法の規準やウェーバーの理解社会学をいまだに社会学のイロハであるとして、学生に教え、自らの研究の礎石の一つとしている。とくに本研究会所属の者に限ったことではない。戦後の社会学においては一時期パーソンズが流行し、パーソンズでなければ社会学でない！というような状況があった。

しかし流行は過ぎ去る。機能主義、現象学的社会学、ハバーマス、ルーマン、ラベリング、今はまた構築主義、ブルデュー・・・そんな流行を乗り越えてきたのがデュルケームであり、ウェーバーだと言えなくもないが、100年間停滞してきた学問というのでは、あまりに寂しい。とりわけいま、理論的貧困が日本の社会学を襲っているとしたら、あの山ほどある学会での発表はいったい何を意味するのか。社会学の繁栄？それとも社会学という巨大な屋敷？

デュルケームの『社会学的方法の規準』に代わる社会学の規準はまだない。そこでこの報告は、新しい社会学の規準を提示したいと思う。とりあえずデュルケームの規準をひっくり返すことが必要であり、それを新しい規準とする。

1. <社会的事実の外在的でない。> 「社会的拘束の観念における最も本質的な要素・・・行動と思考の集合的諸様式は諸個人の外部に実在性をもつ。」（規準、第2版序文）社会的事実の実在性は、違反にたいする制裁という形で触知できるとするデュルケームの考えは、誤っている。むしろ重要な点は、逸脱行動や規範から外れる場合に生じるサンクションの実在性ではなく、逸脱しない場合や規範に沿った行動をしている時の、社会的事実の作用であり影響力である。社会的事実の内在的である。

2. <社会的事実が物ではない。> 「第一の、そして最も基本的な規準、それは、社会的事実を物のように考察することである。」（規準、第2章）Dによれば、社会的事実とは、行動と思考の集合的諸様式とされ、個人はいつもこれに従っているとされる。そして個人はこれらをすでに構成済みのものである。だから「社会的事実を变形することは、不可能とは言わぬまでも、容易なことではない。」確かに社会的事実がいつも構成済みである。しかし既に出来上がっているものがすべて最高かといえそうではない。今まで当然とされていた制度が、たいした合理的根拠をもたなかったりする。それらは変革しなければならないし、变形することが可能である。社会的事実が可塑的で変更できる。

3. <社会的事実が拘束性をもたない。> 社会制度は個人を拘束しているのではない。例えば学校制度により日本では最低12年間を学校の中で過ごすことになっている。すべての子供は強制され、拘束されている。学校へ行かない子供、というのは新興宗教団

体で育った子か、学校制度ができて間もない頃の子供たちぐらい。しかし学校制度は子供を強制したり、拘束したりするわけではない。Dがそうした社会制度の例とするのは、言語、貨幣、取引信用、仕事の上での慣行など、非常に基本的なメディアだ。「私が自分の思想を表現するために用いる記号の体系、・・・にも私は、同国人に対してフランス語を話すように義務づけられてはいないし、法定の貨幣を用いるように強制されているわけでもないが、しかし、そうしない訳にはいかない。」これは社会的事実の拘束や強制であろうか？社会的事実とは、抵抗する行為者を強制力によって拘束する、というふうには作用するのではない。合理的な行為準則として、行為者はすすんでそのように行う。この点は、マックス・ウェーバーの方が正しい。合理的行為は、強制や従順を必要としない新しいタイプの行為だ。

4. 新しい規準についての姿勢

もともと社会学的認識が求められた出発点には、社会の歴史的变化をどうとらえ、どう対処するかという実践的課題があった。古くはモンテスキュー、19世紀にコント、マルクス、スペンサーら、社会学の創設者たちは、自分たちを取りまく社会の激動をどうとらえるか、その行く末を予測し、どう対処するべきかを考えるために、社会現象の客観的な認識を志した。社会はつねに変動し、変化する。そこに出発点がある。変化をどうとらえ、どう対処するのか？認識と実践は当然ながら強く結びついている。

しかしその後、社会科学の中でマルクス主義が政治的イデオロギーとして歴史上途方もない意味をもち、さらにその凋落という事件は限らないインパクトをもたらした。このため社会科学の実践的意義やイデオロギーとしての側面にはアレルギーが生じ、またわれわれ自身が自己禁欲を余儀なくされてきた。しかしここで原点に帰り、社会学的認識に内在するはずの実践的志向を取り戻そう。

いくら社会的事実を客観的に示すスキルを高めたところで、それはしよせん「外にある物としての社会現象」をながめる能力が増えるだけだ。この問題設定、このように通常科学と化した社会学的知によっては、自分自身が社会的行為者であるというあたりまえのこと、社会的事実をあまねく存するという事実を見つめることは不可能である。

社会的事実などどこにも「外在」しない。それはそこ此処に、すべてに、私の中に、あなたの中に、どこにでも(ユービック)あるのだ。外とは一体どこなのか？自然科学を模して社会学をモデル化しようとしたデュルケームの限界がそこにある。自然現象の背後にある物理的原理や化学的变化、生命現象の背後にある生理学的反応・・・それらが自然現象を規制し、あやつり、現象させている。では社会現象をあやつり、規制し、拘束し、現象させるものとはなに？誰も何もあやつってなどいない。隠された原理などない。拘束する「社会」や「集団」や「村落」やマトリックスなど存在しないのだ。すべては私の中に、あなたの中に、そこに、此処にある。社会表象、集合表象とは私やあなたの個人的表象の一部にすぎない。そこから出発しなければ、「社会」は外に突っ立ったままで、私の中に回収することができないのである。

第7回研究例会報告要旨

〔報告1〕 野中 亮(大阪樟蔭女子大学)

『社会分業論』におけるコミュニケーションの問題 「社会形態学」と方法論をめぐる

本報告の課題は、「社会形態学」とデュルケームの社会学方法論の関連を検討し、『分業論』から『原初形態』にいたる議論の焦点をくり出す形で、デュルケーム社会理論におけるコミュニケーションの問題の重要性を明らかにすることである。

デュルケームの諸業績を通じて一貫しているのは、「心的実在としての社会」という認識と、象徴の視点の重視である。ただし、この「象徴の視点」は、『社会分業論』から『宗教生活の原初形態』にいたるまでの間に大きな変化をとげる。そこで、本報告ではデュルケーム理論における象徴の意味合いの変化を「社会形態学」と関連づけて追ひ、考察を加える。

『社会分業論』における象徴論は、基本的には方法論に属するものであった。『分業論』

において強調されたのは、まず道徳的現象である社会的連帯を観察・測定・分類・比較するには、それを象徴する外的事実置き換える必要があるということ、次に、社会的連帯の本質的な部分を「反映」しているものとして象徴としての社会的諸事実が位置づけられていることの2点である。

こうした象徴の視点は『社会学的方法の基準』に引き継がれ、「社会類型」・「社会種」という概念に連結された。その際、動的密度と社会容積という二つの独立変数が設定され、動的密度は社会類型設定の基準である社会環節の融合であるとされている。つまり、社会類型とは、デュルケムにとって重要な独立変数である動的密度と社会容積の値が形態的＝象徴的に表現されたものなのである。ところが一方で、動的密度は「道徳的密度」ともよばれており、基本的には道徳的・心的な変数である。にもかかわらず、『社会学的方法の基準』ではこれらは社会形態学にかかわる事実だともされている。

このように社会形態学の内容を検討してみると、その対象が結局は道徳に代表される心的実在であることがわかる。いわば社会形態学とは、社会の心的実在の象徴であるところの形態を対象とする学であり、その意味で社会形態学は「本質がさまざまな形象によって映し出される」という象徴論を前提としているのである。また、社会的本質をわれわれがその目で見るとは象徴という形あるものによるしかないという認識は、本質を探るための手段として象徴を位置づけるものとなり、そうした意味で、初期象徴論は方法論としての側面が強いものだといえよう。

しかし、『自殺論』における「集合表象」をめぐる議論では、象徴の位置づけが大きく変化している。「基体」から発生した集合表象はある程度の自律性をそなえ、「基体」に反作用を及ぼすようになるとされた。形態学的事実である「基体」と生理学的事実である「集合表象」は、相互に浸透しあい、影響を与え合い、依存しあうようものと見なされるようになっていったのである。こうなると、当初は方法論であった象徴論は、デュルケム社会理論の中核にかかわる必要不可欠な要素としてその位置付けが変更される。もともと方法論であった象徴論は、集合表象論の段階で理論へと変質しようとしているのである。

周知のように、『原初形態』においては象徴・象徴過程の独自の、能動的な機能が論じられている。心的実在である社会は「集合的沸騰」という濃密なコミュニケーションを契機として成立しているとされ、その際に独自の作用をもつのが象徴だとされたのである。もっとも、『原初形態』においては、「集合的沸騰」の内部的なメカニズムは詳述されていたものの、沸騰状態がいかんして発生するのかという外的条件が明確ではなかった。

しかし、さきに検討したように、『自殺論』までの初期デュルケムの議論が、象徴論を通じて『原初形態』と内的なつながりを保っているとするれば、この問題の解決の糸口を見つけ出すことができる。集合的沸騰の周期性という相違点こそあれ、人口の集中をとまなう濃密なコミュニケーションが創発特性をもつという点で、『分業論』と『原初形態』は軌を一にしているのである。また、「社会形態学」がコミュニケーション増大の外的条件を説明していることを考え合わせれば、『分業論』と『原初形態』の議論は互いに補い合うものとして位置づけることができるのではないだろうか。

このコミュニケーションの問題は、『原初形態』の理論的問題を解決する糸口として、言い換えれば、デュルケム社会理論の展開可能性を広げるものとして今後検討に値すると思われる。

〔報告2〕 飯田剛史（富山大学）

在日コリアンの祭り - デュルケムの考察 -

80年代におこった在日コリアンの祭りを、社会・文化状況を背景に、自己組織化運動として解明し、デュルケムの考察を加えたい。

1. 在日コリアン社会の現況

在日社会は、統合された社会構造というより、さまざまなネットワーク連関（血縁、地縁、契、社縁、ほか）としてとらえられる。80年代以降、差別撤廃運動と文化創造が盛んになる一方、民族アイデンティティは拡散しつつある。

2. 在日コリアン社会の諸宗教（ - 省略 - ）

3. 在日の「祭り」：80年代の三つの祭

	生野民族文化祭	ワンコリア フェスティバル	四天王寺ワッソ
開始年	1983年	1985年	1990年
参加者	生野区の在日コリアン	在日のプロ、セミプロの芸能関係者	在日実業家、日本文化人、政治・経済団体
場所	生野区内、校庭	大阪城野外音楽堂など	四天王寺、谷町筋
内容	農楽パレード、民族舞踊、マダン劇、遊戯	ジャズ・ブルース・舞踏、演劇・映画	朝鮮使節・渡来人のパレード、文化授受のセレモニー
メッセージ	在日若年世代への「民族文化」による連帯意識、アイデンティティ形成の呼びかけ	在日若者へのポピュラー文化による、「ハナ」（統一）の呼びかけ	日本人、在日に、歴史的な朝鮮文化の日本文化への寄与 大阪文化のアジア性 在日の経済力
共通性	非宗教性（世俗性）／80年代に始まる／内容の創造性（非伝承性）／在日人権運動の時期／在日経済力向上期／「大阪の祭」として受容		

4. 「民族祭」の形成：自己組織化

民族文化祭は、一定のリーダーシップのもとに、民族音楽や舞踊活動の諸要素を統合し、さまざまなグループを連結することによって構成されており、民族文化運動のより高次の段階を画するものである。民族文化祭は多様な形をとることができる。

1) 「生野民族文化祭」：この祭りは、ホスト文化への対抗性が強い。2002年に第20回をもって終了した。全国の在日の若者たちに影響を与え、各地に「マダン」とよばれる特色ある祭りが生み出された。「京都東九条マダン」は、対抗性よりも地域共生をテーマとし、日本人も参加している。

2) 「ワンコリア・フェスティバル」：実行委員長は、在日学生運動に加わっていたが、生野民族文化祭の発足に参加し、「祭り」を通じた「ワン・コリア」運動の有効性に気づいた。2002年には大阪市も協賛団体に加わった。

3) 「四天王寺ワッソ」：在日金融機関理事長の発意と、日本人歴史学者らによってプロデュースされた。日本人とコリアンとの親和意識の形成および大阪の新たなオリエンテーションを提示しようとする。スポンサー企業の経営破綻により、2001・2002年度は中止となった。2003年度は復活が計画されたが雨天中止となった。

5. 「民族祭」の象徴性と文化機能

これらの「祭り」はともに「民族」を主題化している。「民族」は、象徴として表現され、主体的に構成され意味づけられてはじめて人々の中に実在化する、すなわち「象徴的実在」（ベラーのデュルケム解釈）である。

「祭り」において象徴としての「民族」は、聖性と曖昧性を帯びている。「聖なるもの」は、宗教の領域を越えて、「民族」を直接に聖化する。「民族」象徴の表現形式が曖昧なことは、現在、「在日」および「祖国」について共通の呼称が成立しえないことから来ている。「民族」象徴の指示する「南北在日の連帯」、「世界のワン・コリア」も曖昧なユートピアである。ただ政治的な統一案はむしろ対立の原因になるので、表現の曖昧性のゆえに、多くの人々の参加が可能になっているともいえる。

在日社会における「祭り」の文化機能は、一定の範囲で新たな民族意識を生み出していることである。極彩色で力強いリズムをもつ「民族文化」を経験することによって、参加者は、ネガティブな民族イメージをポジティブなものに逆転させることができた。

6. 「在日文化」の公共化

在日コリアンの祭りは、「在日文化」の日本社会での顕在化、公共化の機能を果たしている。これらの祭りは、テレビのニュースや特集番組で紹介され、ユニークで魅

力ある行事として広く承認されるようになってきた。在日文化の公共化は、他方、文化的均質化、文化的共通項の形成が前提となっており、その上での差異化が「民族文化」の表現となる。

諸外国からの「ニューカマー」が増え、今日の日本社会の課題として「文化的多元性」、「共生社会」が語られるようになってきた。上の祭りには、日本の行政、教育団体なども協賛、後援に名を連ねるようになってきた。

しかし一方で、日本人の排外的ナショナリズムの傾向も強まってきている。今後は、この相反する二つの動きが、交錯しつつ展開していくことが予想される。

7. 「有機的連帯」の課題と「集合意識」の両義性

「有機的連帯」は今日、異質なものの共生、文化的民族的多元主義の可能性を問う概念として再検討されるべきだろう。

集合意識の両義性：ヒューマニズムとナショナリズム

デュルケムは、近代国家において、集合意識を、普遍的ヒューマニズムとして再構成すべきと考えたが、その予想に反して、排他的なナショナリズムが生み出された。彼は、第一次大戦中にこのフランス・パトリオティズムの矛盾（普遍理念の実現を託した第三共和制への忠誠とフランス民族主義（反ユダヤ）の背反性）を生きた。

[参考文献]

飯田剛史，2002，『在日コリアンの宗教と祭り 民族と宗教の社会学』世界思想社。
ペラー，R. N.，1974，葛西実・小林正佳訳『宗教と社会科学の間』未来社。

[書評1] 池田祥英（早稲田大学）

Massimo BORLANDI, 2000, « Lire ce que Durkheim a lu. Enquête sur les sources statistiques et médicales du *Suicide* » in M. BORLANDI et M. CHERKAOUI (sous la direction de), *Le suicide un siècle après Durkheim*, Paris, PUF: 9-46.

デュルケム『自殺論』の刊行100周年は1997年であるが、それを記念した論文集が2000年にようやく刊行された。この『デュルケムから1世紀後の“自殺論”』に寄稿した論者は、『自殺論』が呼び起こした実践的な関心よりも、むしろ学説史的、あるいは理論的な関心を強くもっている⁽¹⁾。ここでとりあげるボルランディの論文（タイトルを直訳すれば「デュルケムが読んだものを読む：『自殺論』における統計的・医学的典拠についての調査」）も、まさに『自殺論』の学説史的な評価にかかわるものである。内容を紹介するまえに著者のボルランディについて簡単に紹介しておく、彼はイタリアのトリノ大学教授であり、共編著としては『社会分業論』刊行百周年記念論文集である *Division du travail et lien social*（PUF, 1993, Ph. Besnard, P. Vogt と共編）や『社会学的方法の規準』刊行百周年記念論文集である *La sociologie et sa méthode*（L'Harmattan, 1995, L. Mucchielli と共編）などがある。また、デュルケムだけではなく、タルドの学説についても特に未発表資料の発掘に力を入れており⁽²⁾、この論文集においてもベナールとともに編集したタルドの『自殺論』に対する未刊の反論が掲載されている。

さて、この論文においてボルランディは、『自殺論』がもたらした革新とは何かという問題に取り組んでいる。そのためには、『自殺論』の執筆にあたってデュルケムが読んだと考えられる先行研究に立ち戻って、それらとデュルケム説との違いを検討しなければならない。ボルランディは引用されている163件の文献のうち統計的、医学的な文献（87件）に考察を絞り、それを彼が実際には読まなかったものと実際に読んだものに分類する。さらに実際に読まれたものについては、それがどのように読まれ、利用されたかを詳しく検討している。ここではその議論をひとつひとつ取り上げていくことはできないが、いくつか特徴的な点だけを見ていくことにしよう。

まず、『自殺論』の「Bibliographie」と題するリストに掲げている文献のなかには、彼が実際には参照しなかったと考えられるものが相当数含まれている（87件中39件）。これはデュルケムがその他の文献を通じて存在を知った文献である。

残りの 47 件はデュルケムが実際に読んだと考えられる文献であるが、なかでも、『自殺論』以前の自殺研究の集大成であったモルセッリの『自殺』(1879)がもっとも重要な引用文献であり、これを通じてデュルケムは自殺に関するさまざまな先行研究を知ることができたと考えられる。そのほかにもワグナーの『意図的に見える人間行為の規則性』(1864)やジャック・ベルティヨンの「離婚についての人口学的研究」(1882)が、『自殺論』を書くうえでデュルケムがどうしても参照しなければならなかった重要文献であるとボルランディは考える。しかしながら、デュルケムの『自殺論』はこの三つの文献をはじめとするいくつもの先行研究に多くのものを負っているにもかかわらず、デュルケムはそれを必ずしも明確にしなかった。その結果、デュルケム自身がおこなった本当の革新の内容が不明確になってしまったとボルランディは考える。

このような問題のひとつとして、『自殺論』序論における「ヨーロッパの主要国における自殺の不変性」と題する表(「第1表」訳書 27 頁)の問題が挙げられている。ボルランディによれば、この表はモルセッリの『自殺』に掲載された表をもとにして作られているのであるが、デュルケムはモルセッリの表を大幅に単純化している。モルセッリは『自殺』において「1816 年から 1876 年までのヨーロッパ主要国における自殺件数とその増加」と題して不完全ながら 21 ヶ国のデータを取り上げ、最新では 1877 年のデータまで記載しているのに対して、デュルケムはそのうちの 6 ヶ国の 1841 年から 1872 年までのデータしか用いていない。モルセッリの表を見るかぎりでは、デュルケムがというような自殺件数の揺れ動きの仮説は支持できず、デュルケムは都合の良いデータだけを抽出した恰好になっているとボルランディは指摘する。

また、「それぞれの社会は、ある一定数の自殺をひきおこす傾向をそなえている」という命題は、『自殺論』の Quadrige 版(PUF)の表紙にも掲げられ、デュルケムの主張を特徴づけるものと考えられてきたが、この点についても先行研究をみるかぎり、デュルケム以前の論者(ケトレやワグナー、バククルなど)においてすでに見られていた仮説である。また、自殺件数は気温の上昇よりも、むしろ昼間の長さ按比例するというデュルケムが提出したとされる命題についても、古くはブリエール・ド・ボワモンが取り上げており、またデュルケムと同時代においてはタルドが『比較犯罪論』(1886)においてすでに指摘していた。したがって、このようなデュルケムが読んだものを通じて、デュルケムが『自殺論』において成し遂げた真の功績を正確に割り出して評価しなければならないとボルランディは結論づける。

この論文の最大の特徴は、やはりその緻密な文献考証にある。デュルケムの社会学やデュルケム以後の社会学については、わが国においても本研究会の会員をはじめとして多くの優れた研究があるが、デュルケム以前の社会学(社会科学)については、コントやエスピナスなどの主要なものを除いてこれまでほとんど目が向けられておらず⁽³⁾、われわれは事実関係のレベルにいたるまでさまざまなものを知らずにいる恐れがある。たとえば、ジャック・ベルティヨンなどは、デュルケムが『自殺論』を執筆するにあたって必要不可欠な研究を残した高名な統計学者であったにもかかわらず、犯罪者を識別する「人体測定法」を確立した彼の弟のアルフォンス・ベルティヨンと混同されることが多かったように思われる。このような単純な誤解はそれほど重大なものではないかもしれないが、それよりも大きな間違いを犯していたとしても現状では見過ごされる危険が高いのではないだろうか。こうした誤解をひとつひとつ解消していくことが、ボルランディのような地道な文献研究の役割であろう。

もちろん、この研究に問題がないというわけではない。たとえば、ボルランディはデュルケムが作成した図表のデータ総数を数え、それをモルセッリの『自殺』が刊行された 1879 年以前のもの、それ以後のものすなわち 1880 年から 1895 年までのものに分けて集計し、1880 年代以降のデータが少ないことを指摘している(1,630 件中 347 件)⁽⁴⁾。しかしながら、デュルケムが新しい統計資料をあまり利用していないことを示したいのであれば、むしろ図表そのものの数を比較したほうがよいのではないだろうか。というのは、図表のデータは、バラバラに存在しているものではなく、あくまで作成者の分析軸に基づいて有機的に結びついているからである。また、このような量的な研究手法では、古いものであれ

新しいものであれ、デュルケムが用いた統計資料が研究においてどれだけの重要性をもっているかという質的な貢献について明らかにすることはできないだろう。たとえば、序論における「ヨーロッパの主要国における自殺の不変性」(第1表、訳27頁)のように154のデータがある図表と、アノミー的自殺の章における「経済的危機と自殺の関係」(第52表、訳293頁)のようにデータが6つしかない図表を比べると、データ数の違いは大きいものの、『自殺論』における論証への寄与という質的側面における違いは、それほど大きくないと思われる。

こうした疑問はいくらでも提起できるであろうが、ボルランディ自身も認めているとおり、資料の使用法といった主観的な側面は外部に見えている指標から判断することは困難な作業である。むしろ、こうした困難な作業に取り組むことで、デュルケムやデュルケム学派の研究に貴重な資料を提供したという点を積極的に評価しなければならないだろう。

(1) ボルランディ以外の論者の論文については、著者と論題だけを記載しておく。La référence aliéniste de Durkheim : Alexandre Briere de Boismont (Joséphine Besnard), Crise, effervescence sociale et socialisation (Philippe Steiner), Courants sociaux et loi des grandes nombres (François-André Isambert), Suicides et formes anormales de la division du travail (Mohamed Cherkaoui), Sociologie sans parole : Durkheim et le discours des acteurs (Charles-Henry Cuin), Halbwachs et le suicide : de la critique de Durkheim à la fondation d'une psychologie collective (Jean-Christophe Marcel), La destinée du *Suicide*. Réception, diffusion et postérité (Philippe Besnard), Contre Durkheim à propos de son *Suicide* (Gabriel Tarde).

(2) Borlandi, M., 1994, Informations sur la rédaction du *Suicide* et sur l'état du conflit entre Durkheim et Tarde de 1895 à 1897, *Études durkheimiennes/Durkheim Studies*, 6, 4-13 および Borlandi, M., 2000, Tarde et les criminologues italiens de son temps, *Revue d'histoire des sciences humaines*, 3, 7-56 が挙げられる。

(3) コントやエスピナスの思想に目を向けたものとしては、山下雅之『コントとデュルケムのあいだ : 1870年代のフランス社会学』(木鐸社、1996年)や白鳥義彦『『動物社会』と進化論 : アルフレッド・エスピナスをめぐって』(阪上孝編『変異するダーウィニズム : 進化論と社会』京都大学学術出版会、2003年、237-264)などが挙げられる。

(4) モースが司法省の非公開資料をもとに作成した三つの図表のデータを除く。

【書評2】 清水強志 (創価大学)

Jean-Claude FILLoux, 1965, 'Notes Sur Durkheim et la psychologie', *Bulletin de psychologie*, 19: 41-50.

個人に対して外在的かつ拘束的である「社会的事実」を社会学においてはもののように扱うことを主張したエミール・デュルケム(1858-1917)は、一般に「方法論的客観主義者」とみなされることが少なくなく、彼には「個人」あるいは「個人意識」が排除されているとの批判がある。さらに、彼が現実的人間として提示した「人間の二元性」概念ですら「反省する自我」が削除されたものであるとされ、究極的な意見として、(その解釈の誤りから最近においても)デュルケムのような立場では社会学は不可能であるとまで主張するものもある。それでは、デュルケムの社会学とは、本当に、一般に評されるような「客観主義」だけなのだろうか。

フィューによる本論文は1965年と決して新しいものではないが、デュルケムにおける意識論および行為論に関して非常に重要な示唆を与えてくれる。彼はデュルケムにおける心理学の重要さにいち早く気づき、当時(執筆時)の心理学との比較も試みている。そもそも『社会科学と行動』の編者として有名な著者は、もともと社会心理学者であり、心理学や教育の問題を主として扱っていた。このことは、著者が63年からのデュルケムに関する研究論文以来、心理学の視点(より正確には社会心理学的視点)から社会学者デュルケムにアプローチしたことを意味していると言っても過言ではないだろう。それゆえに、本論文は、デュルケムにおける心理学的側面に焦点をあてていることから、現存する誤ったデュルケム解釈に対する1つの重要な示唆を含んでいるといえる。さら

に、著者のデュルケム解釈を理解する一助となるであろう。

著者は、「実験証明における心理学的秩序の発展という頻発や重要性は、デュルケムの読み方をたたく frapper にはおかない」(p.41) という一文から本論文を書き始めている。つまり、それはデュルケムの主張が次々に現れる心理学理論によって否定されるというのではなく、むしろ、独自の心理学的視点を有していたデュルケムの社会学は、その後の心理学の発展とともに再解釈をしなければならない程の卓越したものであったということである。

まず、著者はデュルケムの心理学的観点がどのようなものであるかを著作ごとに1つ1つ確認してゆき、それらのテキストから以下のことを指摘している。つまり、社会学を推敲するのに社会学者デュルケムの目には心理学が非常に重要であった反面、当時の心理学的知識を利用するにはあまりに不十分であったということである。そうして、デュルケムは独自の集合的心理学の必要性を感じ、社会心理が個人心理の法則と異なった固有の法則を有していることを言い添えるならば、自身の社会学を一種の心理学と呼んでも不都合はないとまで述べていたことを確認する。

そして、著者はデュルケムの「心理=社会的テーマ」が A 創造的アソシエーション、B 集合的な心的生活、C 社会化という3つの方向にむかっていたという仮説を立てることが可能であろうとしている。以下において3点を要約しよう。

A 社会は関係のシステムであり、初めから人間は関係の中で生きている。それゆえに、デュルケムにおいては、個人的なものから社会を理解するのではなく、アソシエーションの事実から理解しなければならないのである。デュルケムにとって重要なことは、人間のアソシエーションがダイナミックでまた創造的なものであることである。相互作用から引き起こされ、また相互作用の過程の側面を持っているのでダイナミックと言える。またこの過程が 現れ出る 現象の創作者であるから、創造的と言えるのである。デュルケムはこの現象を小グループの観点から描いている。

B 集合的心理生活 はデュルケムにおいて典型的なものである反面、その内容は明確とはいえない。社会心理学 固有の対象である 心的生活 は、社会学の対象でもあるというこの表現をどのように理解すればいいのだろうか？デュルケムは 集合表象の心理学 を想起させる。そして、アソシエーションを基礎にして一度形成された集合表象は、一種の自立を獲得し、決まり文句(formule)の中でまたは物質的なものの中で明確な形をとり、そして意識の中に社会化という間接的な方法によって実在の基盤を形成する。「デュルケムは、この自立について語ることによって、 集合的観念形成 が彼特有の決定論に従うことを言いたかったのである」(p.45)。実際、一方では、集合表象は 物質的なもの の中に 具現化され 、 定着し 、 明確な形をとる のである。Paul Bohannanによれば、デュルケムの集合意識は連帯の道具であり、集合意識のおかげで諸個人間で意志の疎通ができるようになり、相互的期待の中で行動することができるのである。その時、集合意識は 社会的行為の文化的固有語(idiome) であると彼は述べている。

C 相互作用の過程の範囲内で生じているまた生じた習慣、共通感覚、集合表象の獲得は教育なしに永続することはできないし、また教育なしに構造それ自体が作用することはないという、パーソナリティの社会化に関するデュルケムの発言は正しい。現実の個人とは、「社会化された個人」であり、ある社会の一員としての「有機的・心的・社会的存在」である。そのような人間は、われわれがパーソナリティ⁽¹⁾と呼ぶものと一致しているのだろうか。個人は社会に参加することによって、「自然(nature)」から「価値」への移行が要求される。そして、参加による影響のもとでつくられた 新しい存在 はわれわれにとってもよいものを持つことになる。デュルケムの「非個人的なもの」、「文化的なもの」、「社会的なもの」という表現に見られるように、われわれの存在はますます パーソナリティ であるという結果になる。「社会化というこの特有の過程、それは心的=社会的過程であるが、それがないと社会は分散する。そしてこの3番目のテーマはどのようにして社会は存在可能かということの説明する他の2つのテーマに加わる」(p.47)。

さらに、著者の指摘を続けることにする。デュルケムによると、社会は意識の中で構成され、またパーソナリティは社会化によって構成されることから、個人と社会の間の葛藤は乗り越えられるという。彼の基本的な命題は、社会が規則を押しつけるというものであり、規則は単に社会的コンセンサスの媒介物であるだけでなく、精神的安定と個人生活の要因でもある。そして、この命題は、理性の働きの上に、あるいはむしろ次に続く心理的事実の上に基礎を置くことになる。

個人的調和が確立されるために、つまり、欲求が満たされていること、それゆえに、目的を見つけていること、そしてそのための道具を自由に使えることが必要である。動物の場合、調和はひとりだけで生じる。しかし、人間の場合は異なり、第1に、衝動は最小限の役割を果たす。次に、もっとも有機体に結びついている欲求が社会化によって深く修正される。最後に、人間を行動させる欲求の大部分は、感性的欲望ではなく、集団生活によって作られた欲望となる。そこからデュルケームの社会行為の原理が生じる。つまり、ひとたび呼び覚まされた諸欲望が、無限の欲望をもっているのなら、また鎮められるや否や新しい形をとるなら、それらを満たして落ち着かせようと試みることは重要ではない。人間が幸福に生きるためにしなければならないことは、自分の境遇で満足することである。欲望を規制する制限や限界を生じるのは、社会からである。そこにわれわれは心理学的概念を見つけたのである。

そして、著者は「デュルケームの社会学概念が精神的緊張の心理学から切り離せないかのようにであった。(中略)もしこれらの考察が正確なら、デュルケームの社会学主義は特殊な心理学なしに進むことはできない。(中略)一方では、社会的生成の図式は、アソシエーションの過程、意見と信念の相対的自立の現象、アソシエーションに土台を提供する決まり文句や構造の中に明確な形をとる感情的また道徳の流れ、そして最後に(教育と社会化という間接的な方法によって)社会が組み込んだ人間を強調する。他方では、(中略)個人心理学と社会心理学を推敲している」(pp.49-50)と総括している。

本論文における重要性とは、デュルケームの学問としての「心理学」評価を述べるだけでなく、『社会分業論』をはじめとする各著作の中でいかに心理学的要素が重要であったかを確認し、さらにデュルケームの社会学を心理学の立場から考察したことである。

現在、私自身、シンボル論および認識論からデュルケームの行為主体について考察しているが、本論文では随所にシンボル論につながる萌芽的要素を含んでおり、また著者自身はデュルケームの心理 = 社会学がレヴィンの場の理論やゲシュタルト心理学に通じるものがあると指摘している。それらに関する議論は詳細に展開されていないとはいえ、デュルケームの社会学、ひいては行為論を考える上で非常に重要な指摘であることはまちがいないように思われる。

本論文は、さらなる深い洞察を感じるところであるが、著者のような心理学的立場からのデュルケームへのアプローチは、従来の(誤った)デュルケーム解釈を修正させる非常に重要な意味を有しているといえよう。今回、書評を書く機会を頂いて、私はあえて著者のデュルケーム研究初期の論文について扱ったが、それは非常に重要な価値を有していると考えたからである。そして、改めて著者のデュルケーム解釈を確認でき、またこれ以降の著者の諸論文・諸著作を再読する必要性を感じた次第である。

(1) 心理学者でもある著者においてもっとも重要な概念の1つであるパーソナリティ概念とデュルケーム社会学の接点を探るところに著者の重要な視点がある。パーソナリティとは、「ある個人が他人と諸特性を共通にすることがあっても、なお、彼に特有なユニークなもの」、「一個の体制であり、統合されたもの」、時間的に変化するもの、刺激でも反応でもなく、両者の間にたつ媒介変数として現れ、「行動を通じて、また、行動を貫いて現れる1つの型として現れる」。それは「ある個人の生活史の流れの中で、この個人の行動を規定する体系の総体が示す独自の形態である」(フィュー『パーソナリティ』寿里茂訳、クセジュ文庫・白水社、1958年、12頁)と著者は定義的に述べている。

会員業績

池田祥英, 2003, 「タルド犯罪学における模倣論」『日仏社会学年報』13: 71-90.

磯村和人, 2003, 「道徳と能力のシステム パーナードの人間観再考」経営学史学会編『現代経営と経営学史の挑戦』文眞堂: 126-136.

江頭大蔵, 2003, 「現代日本社会における出生率の低下と規範意識の変容」『広島法学』27(2): 255-283.

大野道邦, 2003, 「記憶と文化の二重の関係 『赤穂事件』記憶をめぐる」大野道邦・小川伸彦・山泰幸・宮崎 翠『記憶と文化 『赤穂事件』記憶への文化社会学的アプローチ』(平成13~14年度科学研究費補助金研究成果報告書): 1-21; 31-42.

岡崎宏樹, 2003, 「無限という病 デュルケーム・バタイユ・ラカン理論による現代アノミーの分析」『フォーラム現代社会学』2:84-97.

白鳥義彦, 2002, 「高等教育協会とフランス第三共和政下の高等教育改革」『日仏教育学年報』8(通巻

- 番号 No.30) : 76-85 .
- , 2003a, 「経済と社会学 デュルケーム社会学の源泉」『社会学雑誌』(神戸大学社会学研究会) 20: 80-94
- , 2003b, 「フランス第三共和政期における高等教育と民衆教育」『日仏教育学会年報』9(通巻番号 No.31) : 103-114 .
- , 2003c, 「日本の高等教育における留学生」アレゼール日本(高等教育と研究の現在を考える会)編『大学界改造要綱』藤原書店: 130-144 .
- , 2003d, 「『動物社会』と進化論」阪上孝編『変異するダーウィニズム 進化論と社会』京都大学学術出版会: 237-264 .
- , 2003e, [翻訳] イヴ・デロワ(Yves DELOYE)著「失われた時間性を求めて 政治的なものの標定に対する歴史社会学の貢献」『社会学雑誌』(神戸大学社会学研究会) 20: 63-79 .
- 田中拓道, 2003, 「『連帯』の思想史のために 19世紀フランスにおける慈善・友愛・連帯、あるいは社会学の起源」『政治思想研究』3: 97-114 .
- 中島道男, 2002, 「パウマン道徳論の解釈をめぐって 批判的検討」『研究年報』(奈良女子大学文学部)46: 59-71 .
- , 2003a, 「社会学の建設者たち」満田久義編『現代社会学への誘い』朝日新聞社: 308-25 .
- , 2003b, 「パウマンの社会理論 道徳と政治のあいだ」『奈良女子大学 社会学論集』10: 23-45 .
- , 2003c, 「公共哲学としての社会学 へのいくつかの途」『ソシオロジ』147: 136-38 .
- 藤吉圭二, 1994, 「モースの『全体性』概念の検討 『贈与論』を契機として」『京都社会学年報』(京都大学文学部社会学研究室) 1: 83-96 .
- , 1995a, 「『敵意』に転化する『好意』 『贈与論』における『気前のよさ』をめぐって」『ソシオロジ』124: 115-130 .
- , 1995b, 「現代における『全体性』のかたち モースにおける『人間』観の検討」『京都社会学年報』(京都大学文学部社会学研究室)3: 111-125 .
- , 1999a, 「現代社会における『贈与の道徳』 モース『贈与論』における社会的提案の検討」『高野山大学論叢』34: 39-55 .
- , 1999b, 「築 90 年の国際交流 『国籍・性別不問』京都大学吉田寮の試み」『ライフ・イベント 語られる留学』(京都大学留学生研究会) : 117-141 .
- , 2003a, 「近代社会における『気前のよさ』 モースによる同時代への発言をもとに」『高野山大学論叢』38: 41-54 .
- , 2003b, 「高野山におけるデジタルアーカイブ 高野山大学の取り組みを中心に」『密教文化』(密教研究会) 210: 1-30 .
- , 2003c, [書評] 佐藤博樹・石田浩・池田謙一(編), 2000, 『社会調査の公開データ 2次分析への招待』東京大学出版会『記録と史料』(全国歴史資料保存利用機関連絡協議会) 13: 58-61 .
- 三上剛史, 2003, 『道徳回帰とモダニティ デュルケームからハバーマス ルーマンへ』恒星社厚生閣 .
- 山田陽子, 2002a, 「授業に組み込まれる心理学的技術」山中浩司編『検査医療における「標準化」の社会学的分析 現代日本の状況と国際比較』(2000 ~ 2001 年度科学研究費補助金研究成果報告書) : 129-155 .
- , 2002b, 「心理学的知識の普及と『心』の聖化」『社会学評論』53(3): 380-395 .
- 横井敏秀, 2003, 「デュルケームにおけるフランスの国民的アイデンティティの問題」『日仏社会学年報』13: 51-70 .

§ 編集事務局より §

ニューズレター第4号をおとどけします。2003年は第6回例会を、常葉学園短期大学の巻口会員のご尽力で、初夏の静岡で開催し、第7回例会を、原点に返って第1回と同じく初秋の奈良女子大学にて開催いたしました。報告、コメントをお引き受けいただいた会員の皆様ほか関係各位にあらためてお礼申し上げます。

2004年は、4月24日(土)に広島大学にて開催予定の第8回例会(創価大学の清水会員と関西学院大学の成定会員による報告)の後、9月25日(土)、26日(日)の両日には高野山大学にてデュルケーム=ジンメル合同研究会が企画されています。合同研究会シンポジウムは、(1)近代とポスト近代、(2)デュルケーム/ジンメルと現代社会学、(3)デュルケーム/ジンメルと現代社会の3つのテーマを設定し、報告者等の調整を行っています。会員の皆様のご協力がいただければ幸いです。第8回例会、合同研究会とにもご期待ください。